

第四十三回 「全日本中学生水の作文コンクール」 岐阜県優秀作文集

水について考える

主催 水循環政策本部、国土交通省、岐阜県

後援 文部科学省、厚生労働省、農林水産省、

経済産業省、環境省、

独立行政法人水資源機構、

水の週間実行委員会、全日本中学校長会

「全日本中学生水の作文コンクール」について

「全日本中学生水の作文コンクール」は、次代を担う中学生の皆さんに、暮らしの中で体験している水にまつわる話や、ご両親、ご親族、先生方から学び聞いた話などをもとに、「水」や「今後の水の使い方」について考えていただくという趣旨で、水の日・水の週間の行事の一環として実施しています。

今年第四十三回を迎え、岐阜県表彰として最優秀賞一作品、優秀賞二作品を選定しました。

この三作品を優秀作文集としてとりまとめ、岐阜県のホームページに掲載します。

いずれも水に対する真剣な思いが伝わってくる作品です、ぜひご一読ください。

「第四十三回全日本中学生水の作文コンクール」(※岐阜県分)

一. 応募要領

① テーマ 「水について考える」(題名は自由)

② 対象 中学生(令和三年度に岐阜県内の中学校に在学中の者、又は県内在住の中学生と同じ学齢の者)

③ 原稿 四百字詰め原稿用紙四枚以内、日本語により表記されたもの

④ あて先 岐阜県都市建築部水資源課

⑤ 募集締切日 令和三年五月七日

⑥ 著作権等 応募作品は個人作品に限ります。

・ 応募作品の著作権は国土交通省及び岐阜県に帰属します。

・ 応募作品は返却しません。

二. 応募状況 応募学校数 五校、 応募総数 三十七作品(一年…二作品、二年…三十四作品、三年…一作品)

三. 審査 応募作品を岐阜県で審査(地方審査)し、五作品を中央審査対象作文として国土交通省に推薦しました。

中央審査における入選以上の者を除き、岐阜県表彰受賞者を選定しました。

目次

国表彰（中央審査）

該当なし

岐阜県表彰（地方審査）

【最優秀賞】（岐阜県知事賞）

『水が提供されることのありがたさ』

多治見西高等学校附属中学校

二年 多治見 友南（たじみ ゆな）

【優秀賞】（都市建築部長賞）

『共存する川』

土岐市立泉中学校

一年 野村 美稀（のむら みひ）

【優秀賞】（水資源課長賞）

『河川の役割く土砂が動くく』

岐阜大学教育学部附属小中学校

九年 若原 千大（わかほら ちひろ）

「ゴクゴクゴク。」

いつも当たり前のように安全な水を飲むことのできる私たち。日本では、蛇口をひねるだけで、必要な分を使うことができます。しかし、これが海外の場合このように蛇口から出てくる水を使うことができません。

私は、五年前に中国に行きました。中国では、水道水を飲むことができません。そのため、歯磨きをするとき、口をゆすぐときなどたくさんのごみにペットボトルを使用します。このとき私は、なぜ中国では水道水が飲めないのか気になって調べてみました。すると、水道水が飲めない国が多いのはなぜかなどの記事が出てきました。読んでみると、水道水が飲めないのは中国に限らずたくさんの方があり、逆に日本のように設備が整えてある国の方が少ないということを知りました。主な原因は、国土の面積やコスト面の問題だそうです。日本のように小さな国では、整備が進めやすいですが、中国のように大きな国は時間や費用もかかり簡単なことではありません。また、飲む水道水を作るには、水に含まれる不純物や細菌などを完全に消し去る浄水処理をする必要があります。これらの処理には高度な技術と莫大なコストがかかってしまいます。また、先進国がこのような状況である国もあります。先進国がこのような状況ならば、発展途上国ではこれよりもっとひどい状況なのではないかと私は想像します。そして、発展途上国では水道自体がない国も珍しくなく、深刻な水不足に悩まされているケースもあることを知りました。私は、こういった国のことを考えるだけで、複雑な気持ちになります。日本人にとって水道水が飲めることは当たり前となってしまっています。日本もいつ水不足が深刻になるかわかりません。だから、安全な水道水が飲めることに日々感謝して、水をこれから更に大切にしていかなければならないと思いました。

私たちが住んでいる青い地球。海と陸の割合は、七対三と社会の授業で学んだことがあります。地球の半分以上を占めている海ですが、塩水ということで、私たち人間が飲める水は、0.0一パーセントとされています。この水を守っていくには、私たちにどのようなことができるのでしょうか。私はこの二つのことをやっていきたいと思っています。

一つ目は、日々節水をすることです。私たちが生活する中で、水は欠かせないものです。そんな中でも、歯磨きは、コップに注いだ水です。手を洗う時は、無駄遣いをしないなど自分にできることで節水を心がけていきたいです。

二つ目は、川などの自然を守ることです。地球温暖化が進んでいる今、自然破壊も進みつつあるこれらに向けても大事なことだと思います。身の回りにはたくさん川があります。海外で水が飲めない理由では、川などが挙げられています。そんな水をよごしたりしないようにしていきたいです。

現在、日本のように安全な水道水が提供される国は多くありません。自然が豊かな日本でも水は無限にあるものではありません。私たち一人一人が、水を無駄遣いしないこと、自然環境を守っていくことが必要です。また、今回の作文を通して、今の世界の水がどのような状況であるのかなどたくさんの方に触れていく中で、早く水道水が提供できる国を増やしていかなければいけないと思いました。そのためにも自分には、何ができるのか考えて生活していきたいです。これからはさらに安全な水道水が飲めることに感謝して、これからも水を大切にしていきたいです。

土岐市立泉中学校 一年 野村 美稀

私の住んでいる土岐市には『土岐川』が流れている。この川は、恵那の夕立山の北のみねから、恵那、瑞浪、土岐、多治見を流れ、愛知県に入ると、川の名前は庄内川に変わる。名前に「土岐」とついているので私にとっては愛着のある身近な川だ。

私の曾祖父、祖父、祖母、母は子供のころから土岐川を見てきた。曾祖父、祖父は川で泳いだ事、祖母は川が陶器の粘土で真つ白だった事、母は川でメガカを取りに行った事をそれぞれ思い出として語ってくれたが、今は泳げない、メガカもない。ただ、白い川ではなくなった点は幸いな事となっている。

小学校六年生の四月、真新しい教科書をめくっていた時、地域の防災について調べるページに目が留まった。土砂災害、河川のはん乱の写真を見て、すぐそばの土岐川の事が浮かんだ。

帰宅し、土岐川について母に聞いた。川のすぐ横に住んでいる同級生の家がしん水し、水浸しになった事、場所を聞いてあまりにも近くなので他人事ではなく怖くなった。土岐川から災害を起こさない、増やさないために私はどうしたら良いのかを考えていた。その時、「防災」と言う言葉をふと思ひ出した。

火災だけだと最初は思っていた「防災」という言葉だったが、「地震」「津波」「大雪」「火山」「土砂」にも使われる言葉、そして「洪水」にも使われる言葉と知って興味があった。

秋ごろ、自宅に回覧板が届き、「防災士講習」のチラシを見て母といっしょに講義を受講することにした。近年、五十年に一度と言われる大雨が毎年のように降り、日本のどこかで川が氾らんし、何人もの人が命を落としている。毎年五十年に一度と言われ、被害が大きくなってきていること

がとても気になっていた。それには地球温暖化の影響で、海面温度が上昇して台風が大きくなりやすく、被害も大きくなることだった。環境問題は世界中の人々一人一人が考えなければいけない問題だ。講習では土岐市の洪水ハザードマップを見て思うことを語り合った。地域によって急斜面の多い地域、地ばんの低い地域が一目で分かるものだった。洪水ハザードマップは、私の知りたい事が一目でわかり、とても分かりやすいものだった。講習の後、マップを持って母と川の周りを散歩してみることにした。土岐川には、私の知らない小さな川が何か所からも流れていることを知った。小さな川の交わる河口地点では、氾らんの危険が高いことをこの目で確認してみたところ、思っていた以上にゴミがあり、川幅がせまいことにおどろいた。

水は私達にとって無くてはならないのだが、時として私達を苦しめるものでもあるのだ。その水と共存し、より良い方向へ向かわせていくのは私達人間。水の流れの良いシステムを作り、ゴミを除去して川と共に明るい未来にしていけることが私達若者の務めだと思う。

私は、防災士の講習を受け、土岐川により一層、注目していき、土岐市で最年少防災士として学んだことをいざという時に役立てるよう今後には、同じ考えの仲間を増やしていきたいと思っている。

平成最後の夏に発生した「平成30年7月豪雨」では、私の住む岐阜市でも長良川が増水し、川の中央が盛り上がる程の濁流が押し寄せました。濁流には大量の土砂が含まれており、清流長良川の姿は一変していました。この土砂の適正な移動が、河川の抱える課題の一つだということを父から教わりました。長良川本流にダムはありませんが、ダムによる流れの分断は土砂の供給と流出のバランスを崩し、川底を路盤化するそうです。その結果、海辺では砂浜が消えていきます。陸地を細らせる砂浜の消失は、何とかくい止めなくてはいけないと思います。

河川は土砂を運んで陸地を造り、様々な生物のすみかにもなっています。しかし、川底から土砂が流出し、岩盤がむき出しになるような濁流が度々押し寄せれば、魚などが産卵ふ化できる川底の土砂「生き物のゆりかご」は失われます。水量減少や水質悪化は河川流量の確保により改善されてきましたが、川底にたまる土砂の粗粒化と岩盤露出による河床の低下は続いていると聞きます。

河川の土砂の動きが生態系に及ぼす影響などは、岐阜県各務原市の自然共生研究センターが調べていることを現地見学で知りました。その研究成果は、国が岐阜、愛知県境の矢作川で進める土砂を管理するための計画作りに活かされるとのことです。土砂管理にあたっては、河川の生態系に配慮するのはもちろんのこと、土砂の移動が防災や産業にも関わるだけに、上流から下流まで、流域一帯での改善の取り組みが必要なのだと感じました。

土砂を流しすぎないためには、上流の山林の管理が欠かせません。樹木や草、コケや菌類、土壤微生物や昆虫を含む多くの生命を育む山林は、生物多様性保全のため必須です。また、地球温暖化の原因となる二酸化炭素

の吸収、酸素の供給や蒸散作用は、地球環境を調整しています。樹木や草の根が地面を押さえることで、表面土壌の流出や土砂崩れを防ぐ効果もあります。適切に管理された山林の土壌が降水を一時的に留めることで、河川の急激な増水が緩和されるといふ大切な働きもあります。

山林の適正管理の一助として、間伐材の有効活用が必要です。現在はゴミの減量が叫ばれており、使い捨て割り箸はエコでないとの理由で敬遠されがちです。しかし、間伐材から作られた割り箸が有効利用されるのであれば、ゴミとしてもサーマルリサイクルとして発電のために燃やされるのであれば、二酸化炭素による温暖化への影響も少なく、プラスチックの使い捨てとは分けて考える必要があると思います。

他にも何か取り組めることはないか探していたところ「豪雨流木復興の力に」という記事を見付けました。これは2017年7月の九州豪雨で被災した福岡県朝倉市高木地区で住民グループ「高木新づくりプロジェクト」が、土砂災害の被害を拡大させた一因でもあり、今も同地区内に放置されている流木や倒木を薪にして販売する活動です。「厄介者」の流木、倒木を少しずつ撤去し河川周辺の環境を整えるとともに、販売収益を地元自治組織に寄付する一石二鳥の取り組みで、とても良いと思いました。

河川が古くから水運や農業、工業など様々な利用されてきたことは知っていましたが、濁流の力を目にし、色々調べるまでは、河川による土砂の動きについて考えたことがありませんでした。しかし、この力を甘く見ると、海抜ゼロメートル地帯の増加や、生態系への影響による漁業資源の枯渇など、将来、取り返しのつかないことになりそうです。河川の力をもっと理解し、その力を適切に管理していくことが必要だと思いました。